

中国初期禅宗史の研究

——南北二宗の歴史・文献・思想をめぐって——

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程

4120170002 通 然

本論が研究の対象とするのは「初期禅宗」である。当面、「初期禅宗」とは「中国において南北朝時代(439-589)にインドからやってきた菩提達摩の活動を出発点として、その後、約三百余年にわたって馬祖禅の成立(八世紀後半)までに展開した禅宗各派である」と仮に定義して、研究を始めることにしたい。

近代における禅研究の最大の成果は、敦煌文書等の新出文献の発見や紹介によって、従来、禅宗の中で常識とされていた歴史や思想が覆されたという点である。すなわち、慧能—馬祖・石頭系(五家七宗)が後世禅宗の主流となる以前、禅宗初期においては、法如系、慧安系、神秀—普寂系(北宗)、慧能—神会系(南宗・荷沢宗)、法持系(牛頭宗)、智詵系(浄衆宗・保唐宗)等、様々な主張を持つ各派がかつて存在して覇権を争っていたのである。それ以前、中国禅宗史を研究する際に重んじられてきた資料としては、道宣(596-667)の『続高僧伝』、贊寧(919-1001)の『宋高僧伝』、道原(生没年未詳)の『景德伝燈録』等の伝世資料があったが、『続高僧伝』と『宋高僧伝』はその名の示す通り、各時代に活躍した高僧の伝記を編集するのが主目的で、禅宗史を述べようとしたものではない。また、この両書の成立は、それぞれちょうど上述の禅宗各派が成立する以前と衰退した後の時期に当たっているため、各派の生々しい実態を伝える記載が少ない。さらに、『景德伝燈録』等は馬祖や石頭の二派が主流となった後に、史実としての禅宗史を隠蔽し、自らを権威づけようとするところに成立したものであり、客観的な禅宗史を記述したものではないのである。これに対して、敦煌文書中に見出された禅文献は、正しく『続高僧伝』(645年、667年まで増補)の成立した七世紀中期から、『宋高僧伝』(988年)や『景德伝燈録』(1004年)の成立した十世紀末・十一世紀初頭に至るおよそ三百余年の空白を埋める禅宗の歴史や思想を補う直接資料である。禅研究にとって、敦煌禅籍の最大の意義と価値はこの点にあり、その果たし得る役割も極めて大なるものがあると言えよう。

このように、敦煌禅籍に基づく中国初期禅宗史の研究は、この分野の最重要課題として膨大な先学の蓄積があるが、しかし、残された課題は多い。例えば、これら各派の歴史と思想を伝える根本資料についても、「諸本の収集や整理」、「成立や流布の状況」、「思想の解明」等は、いまだ必ずしも十分には行われていないのである。しかも、日本の諸寺院や各文庫に秘蔵された資料の公開などに伴い、従来知られている文献についても、いよいよ再検討の必要性が高まっていると言える。従って、本論が意図するところは、その題目に示されているように、初期禅宗を代表する二派「北宗」と「南宗」を中心に、その歴史・文献・思想をめぐる未解決の諸問題を解明することにある。

本論は第一部「研究篇」と第二部「資料篇」の二部からなる。

第一部「研究篇」は、序論および第一章「南北二宗の形成と対立」、第二章「禅宗灯史の出現と主張」、第三章「禅文献の成立と流布」、結論に大きく分けられる。

序章では、初期禅宗の研究史とその課題、および本論の構成について述べた。

第一章第一節「初期禅宗諸派の呼称について」では、八世紀から九世紀にかけての時期の禅宗各派の呼称について考察した。その結果、南宗と北宗の呼称は、神会の普寂系批判に由来するものであるが、浄衆宗、保唐宗、南山念仏禅門、牛頭宗、並びに南宗中の荷沢宗、洪州宗、石頭宗の呼称は、すべて宗密によって名付けられたものであることが明らかになった。また、南北二宗の対立の影響を受けて、牛頭宗と南北二宗の対立、荷沢宗と洪州宗の対立などが顕在化した。各文献に見られる各派呼称の相違は、これと密接な関係が認められる。そのため、近代の禅宗史研究では、禅宗各派の呼称と分類について種々な混乱が認められる。従って、筆者は歴史的な呼称(すなわち宗密の呼称と分類)を尊重、継承した上で、祖師の名前(例えば、北宗の場合＝神秀派、あるいは神秀—普寂系)を各派の呼称として使用することを提言した。

第二節「普寂の布教活動とその影響」では、北宗の大成者である大照普寂(651-739)の活動を「嵩岳寺期」と「敬愛寺・興唐寺期」に分けて考察し、前者は出家者、後者は在家者を中心に教化したことを指摘した。また、普寂は嵩岳寺を自派の布教の拠点とし、多くの優れた出家の弟子を育てることによって、北宗禅が中国本土のみならず、日本や朝鮮半島にも伝えられた。さらに、普寂は晩年になると、敬愛寺や興唐寺を中心に活躍し、『大乘無生方便門』と『観心論』を用いて開法を行ったが、これらの著作には、当時の社会や仏教界に生じていた種々の弊害を批判した記述が見られる。これは貴族仏教の弊害を批判しつつ、財力のない一般的な在家信者に禅実践の方法を提起したと結論した。

第三節「神会の布教活動とその影響」では、南宗の急先鋒である荷沢神会(684-758)の布教活動を「南陽竜興寺時代」と「洛陽荷沢寺時代」に分けて分析し、前者は多くの文人や士大夫などの在家者と親交を持ち、後者は多くの出家の弟子に指導を行ったと指摘し

た。また、こうした行歴は、当時、慧能系は南方地域を中心に活動していたから、普寂系の影響が強い中原地域では勢力を持たず、経験の浅い神会は、開法の初期には多くの出家者たちを集めることができなかつたためであると考えられる。さらに、神会は開法を行う際に普寂系の「授菩薩戒儀」の方法をそのまま取り入れており、『壇語』に示される普寂系を批判する概念も、『大乘無生方便門』を土台として構築されたものであることから、神会自身も普寂系の影響を強く受けていたことが認められる。

第二章第一節「杜朮撰『伝法宝記』の再検討」では、神会が批判対象の一つとした『伝法宝記』について、この文献の成立や性格等の考察を試みた。その結果、『伝法宝記』は神会が言う北宗でも南宗でもなく、初期禅宗における独自の一派である「法如派」の伝承を伝えるものであると論じた。また、『伝法宝記』が法如と神秀の二人を立伝するのは、法如の弟子の中には法如と神秀の双方を尊敬する人が多く存在したことや、当時の神秀—普寂系が大きな勢力を持っていたこと等と関係するものであると考えられる。さらに、『伝法宝記』では法如を五祖弘忍の正嫡とし、神秀以上の地位が与られていたことから、『伝法宝記』の撰述は、法如への崇敬の念がいっそう深かつた杜朮や元珪、恵超などを中心に行われたと推定される。

第二節「浄覚集『楞伽師資記』の依用文献」では、新出の滋賀県・石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』を手掛かりに、『伝法宝記』と並ぶ現存最古の禅宗史書である『楞伽師資記』の依用文献について考察し、禅思想史研究における本書の資料価値を論じた。その結果、『楞伽師資記』の各章(「達摩章」を除く)に述べられている思想は、当該祖師たちのものではなく、撰者浄覚の作為によって種々の先行文献を借用した上で、多くの経論を教証として取り入れて再編集したものであると考えられる。特に、浄覚が中心に置く「道信章」に言及される『入道安心要方便法門』(擬)はその信憑性が極めて低く、それに基づいて道信の思想を考えることには多くの危険が伴うことを指摘した。

第三節「石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』の出現」では、滋賀県・石山寺に所蔵される天下の孤本、『跋陀三蔵安心法』を紹介するとともに『楞伽師資記』との関係と論じ、この文献の性格や初期禅宗史における意義を解明した。すなわち、『跋陀三蔵安心法』は「跋陀三蔵安心法」と「誌公和尚十四科頌」の二部分によりなり、前者は『楞伽師資記』「求那跋陀羅章」と共通する内容を持ち、後者は『景德伝灯録』、『宗門聯灯会要』、『禅門諸祖師偈頌』に見られるものと同じのものである。「跋陀三蔵安心法」は「求那跋陀羅章」の原資料として先行成立し、その作者は仏陀禅師(跋陀)、あるいは僧稠系統の人であると考えられるが、楞伽主義を宣揚した浄覚は『楞伽経』の訳者、求那跋陀羅を禅宗の初祖とされる菩提達摩の前に据えて、「跋陀三蔵安心法」を達摩の思想の根拠とするために、跋陀三蔵(仏陀禅師)を求那跋陀羅に改変したのである。「誌公和尚十四科頌」は現存諸本の中で最

古のものであり、他の宝誌を作者とする作品とともに、唐の中晩期に出現してから、しばしば禅文献に引用されていた。その理由は禅宗各派の人々が禅の立場を強調するため、宝誌の影響力を借りようとしたのであろうと考えられる。

第四節『師資血脈伝』と荷沢神会』では、神会系の灯史とされる『師資血脈伝』の成立と流布について考察した。その結果、現在、石井本『神会録』の末尾に付されている「六代の伝記」は、独孤沛が『定是非論』の冒頭部分に言及した『師資血脈伝』そのものではなく、そこに略抄したものであると見てよい。また、「六代の伝記」に見られる『金剛経』宣揚に関する部分が後代の付加であることが認められるが、神会の思想には決して『金剛経』を重視していなかったと考えられる。

第三章第一節『観心論』の成立について』では、普寂系の綱要書とされる『観心論』を先ず取り上げ、当時の社会状況と仏教界を支えた主流思想に注目し、従来ほとんど考慮されてこなかった新たな側面からその成立を論じた。その結果、『観心論』は神秀とその弟子たちが中原へ進出する際に、当時の社会に生じた種々の弊害を背景として成立したと考えられる。その思想内容の面では、当時の教学思潮の強い影響が窺える。すなわち、『観心論』は『大乘起信論』の「一心二門」思想に基づき、浄心と染心とに分けており、三毒心や六根不浄を輪廻の根源として、東山法門以来の修行法「観心」を三聚浄戒や六波羅蜜という「菩薩戒」思想と結合し、新たな修行法を唱えた。

第二節「中日韓所伝『観心論』諸本の関係」では、敦煌本や日本・朝鮮伝本『観心論』の諸本を整理し、これらを厳密に対校、分析することによって、従来研究されていなかった日中韓の諸本間の関係を解明した。すなわち、敦煌本の七種は、A系統(S2595、P4646、S5532)、B系統(P2460V、龍谷大学本)、C系統(P2657V、S646)の三つに分けることができる。また、A系統のS2595は最も古く原型に近いものであり、B系統はA系統より後の時期に成立したものであり、「達摩作」と見なされて伝持されていた可能性が強く、C系統は最後期に成立したものであると考えられる。さらに、日本伝本と朝鮮伝本は「達摩の著作」として伝えられたことや、本文も敦煌本のB系統に近いことから、両者は密接な関係があると認められるが、日本伝本は諸本の中で、写誤、欠落した部分が多いから、良いものとは言えないことがわかる。

第三節「日本所伝『破相論』諸本の関係」では、新出の金沢文庫残欠本『破相論』を紹介するとともに、今まで知られている日本所伝諸本との間の重大な相違を指摘し、『破相論』の諸本関係や流布過程を考察した。その結果、『破相論』の六種は、錯簡がない系統(金沢文庫残欠本、五山版『達磨大師三論』本)と、錯簡がある系統(金沢文庫建仁本、金沢文庫建長本、真福寺文庫本、五山版『少室六門』本)の二つに分けることができる。その二系統の祖本は、いずれも、唐の会昌五年(845)に龔朗によって日本の和尚に与えた写本

であった。錯簡がない系統のうち、五山版『達磨大師三論』本は、刊行する際に少なくとも二度に渡って本文が補正されたことが確認される。錯簡がある系統のうち、五山版『少室六門』本は、金沢文庫建仁本、建長本、真福寺文庫本の錯簡と全同ではなく、それを刊行する際に本文を補正しようとした結果、そうした違いが生じたと見ることができる。

第四節『達磨大師悟性論』の思想的特徴では、『破相論』とともに菩提達摩撰とされる『悟性論』の文献としての性格を分析し、その思想が『二入四行論長卷子』と『観心論』を継承したものであることを論じた。すなわち、『悟性論』が「心」に対して、「有」、「無」、「非有非無」や「染」、「浄」と解釈することは、それらを前提として成立したと考えられるのである。また、『悟性論』はもともと『観心論』と連写されて日本で伝持されていたこと、北宗禅文献とされる『禅門経』の文章を引用することによって、本書を北宗禅内で編まれたものと位置付けた。

第五節『南陽和尚問答雜徴義』諸本の関係では、「神会語録」、あるいは「神会録」と呼ばれることのある『問答雜徴義』諸本の構成を整理し、諸本間の関係をできる限り解明した上で、本書の成立過程とその変遷を論じた。その結果、現存する『問答雜徴義』の諸本は、S6557、石井本と、胡適本(P3047)の二つの系統に分けることができる。S6557と石井本の底本は、劉澄の序文を有し、本文の内容が現在の石井本の全体に相当するが、当初、「六代の伝記」や「大乘頓教頌并序」は付されていなかったと考えられる。胡適本(P3047)の底本には、S6557や石井本と同様に『定是非論』からの引用が含まれていたが、その後、『定是非論』と連写された段階で、それと共通する部分が意図的に削除された。また、『問答雜徴義』は、神会が洛陽の荷沢寺に入ったことを契機として南陽時代の活動を中心に編集したもので、その後、継続的に増補が行われており、現存する諸本の形態になったと考えられる。

結論では、各章で明らかになった諸点を整理し、結論をまとめた。

第二部「資料篇」は、第一部の論述に関連する主要テキスト、すなわち『破相論』、『観心論』、『跋陀三蔵安心法』を取り上げて、その翻刻、対校などの作業を行った。これらのうち、資料二の大部分を除いた残り文献は、今まで学界に紹介されていなかったものである。

資料一「金沢文庫残欠本『破相論』の翻刻」では、他の日本伝本『破相論』との間に重大な相違が認められ、日本所伝諸本の関係や日本伝本と朝鮮伝本の間を解明する上で、極めて重要な意義を持つ神奈川県立金沢文庫所蔵残欠本『破相論』のテキストを翻刻した。

資料二「日本所伝『破相論』の諸本対校」では、現在までに知られた日本伝本『破相論』六種の対校テキストを対校して、駒沢大学図書館所蔵五山版『達磨大師三論』本『破相論』を底本として上段に翻刻し、それぞれ異本の異同を下段に注記した。

資料三「朝鮮所伝『観心論』の諸本対校」では、現在までに知られた朝鮮伝本『観心論』六種のテキストを対校して、韓国ソウル大学図書館所蔵鶏林府本『観心論』を底本として上段に翻刻し、それぞれ異本の異同を下段に注記した。

資料四「石山寺蔵『跋陀三蔵安心法』の翻刻と対校」では、初期禅宗史書である浄覚集『楞伽師資記』の成立やその性格を解明する上で、極めて重要な役割を果たす滋賀県大津市大本山石山寺所蔵の稀観書、『跋陀三蔵安心法』を底本として上段に翻刻し、それぞれ異本と対校して、その異同を下段に注記した。